

# 地域の日本語教室で望まれる日本語ボランティアの 資質及び能力

—愛知県岡崎市の日本語教室での調査から—

清原 剛

日本大学大学院総合社会情報研究科修士

## The Qualities and Abilities Necessary for Volunteers of Japanese Language Class in the Local Area.

—Research Collected from Japanese Language Class in Okazaki, Aichi Prefecture—

KIYOHARA Tsuyoshi

Former graduate student of Graduate School of Social and Cultural Studies, Nihon University

---

The purpose of this paper is to identify qualities and abilities for volunteers of Japanese language class in the local area. The questionnaire (consisting of 41 items modified from past studies) was completed by other Japanese language volunteers. Volunteers think that is necessary to have “Counseling mind”, “Human behavior”, and “Teaching skills”, but instead are finding that such “Specialized knowledge” and “Teaching experience” is not necessary. Students studying Japanese language were interviewed. Student placed emphasize on “Human behavior”, “Teaching skills”, and “Counseling mind”. They also think that “Teaching skills” is important than which volunteers think. Students seek more practical methods when learning Japanese language. Volunteers need to have the ability to develop lessons that meet the needs of students beyond textbooks, and the ones encourage students to actively participate in classes.

---

### 1.はじめに

地域における日本語教育は、1970年代以降の中国残留邦人の帰国やインドシナ難民の受け入れがきっかけとなった。その後、1980年代以降になると国際結婚する配偶者が増加し、さらに1990年代以降の南米の日系人、技能実習生の出現により来日する外国人の多様化が進んだ。このように多様化する外国人住民に対して、国内各地で任意団体やNPO法人、各地域の国際交流協会や地方公共団体などが日本語教室を開設し、地域における日本語教育を実施している。特に近年、中長期的に日本に居住し、家族とともに地域で暮らす外国人が増え、これらの人を対象とした地域の日本語教室が担う役割は年々大きくなりつつある(永田・山本 2012)。日本国内では急速に進む少子高齢化に伴う深刻な労働者不足が叫ばれている。

政府はその担い手として外国人労働者の受け入れを拡大するため、2019年4月には改正出入国管理法を施行した。今後、国内に在住する外国人は一層の増加が見込まれ、地域の日本語教室に期待される役割は一層大きくなると考えられる。

地域の日本語教室が抱える問題の1つに学習者の参加に関する問題がある。教室に、2、3回来ただけで次から来なくなる学習者や、2、3カ月は継続したことからそのまま継続できると判断していたにもかかわらず参加しなくなる学習者がそれなりに存在する。その理由は、学習者ごとに事情は異なるだろうが、地域の日本語教室の日本語の学習画面において、教師の役割を果たす日本語ボランティアに望まれる資質と能力について、日本語ボランティアと学習者の間に認識のズレがあるからではないかと

という疑問を持った。

2018年の文化審議会国語分科会日本語教育小委員会の報告では、多様な背景を持つ外国人の受入れが進む中、各分野における日本語教育の必要性は益々高まっていると述べられ、各分野での教師に求められる資質及び能力を明確にすることは重要な課題となっている。また、現在、政府により、日本語教育の質の担保や向上を目指して、日本語教師の公的な資格の創設に向けた議論も始められている。

このような中、今後、日本語ボランティアにはこれまで以上に教室への貢献が期待されることが考えられるが、先に指摘したような現時点での問題については、早急に解決策を検討しておく必要があると思われる。そこで、本研究では、その解決の糸口を探すために、地域の日本語教室において、日本語ボランティアと学習者という2方向の視点から効果的な日本語教育を行うために地域の日本語教室の日本語ボランティアには、どのような資質及び能力が求められているか明らかにすることを目的とする。

## 2. 先行研究

長野(2013)は、先行研究等の文献から以下のようにまとめている。

- (1) 日本語教師の資質といえば、1976年頃までは、言語知識を中心とした「専門性」のみを指していた。
- (2) 1985年報告<sup>1</sup>において初めて「人間性」や「自覚と情熱」など、専門性以外の事項が言及された。
- (3) 2000年報告<sup>2</sup>の教育内容は、言語知識や教授法

<sup>1</sup> 文部省(1985)『『日本語教員の養成等について』の送付について』による。

<[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/nc/t19850530001/t19850530001](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19850530001/t19850530001)>2019年12月8日アクセス

<sup>2</sup> 文化庁日本語教員の養成に関する調査研究協力者会議(2000)「日本語教育のための教員養成について」による。

<[http://www.bunka.go.jp/tokei\\_hakusho\\_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku\\_suishin/nihongokyoiku\\_yosei/pdf/nihongokyoiku\\_yosei.pdf](http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku_suishin/nihongokyoiku_yosei/pdf/nihongokyoiku_yosei.pdf)>2019年12月8日アクセス

に加えて、学習者理解や異文化理解などを含む広範囲のものとなった。

- (4) 2000年報告の教育内容には、横溝(2002、2006)のいう「自己教育力」に関する用語が盛り込まれた。

横溝(2002)は、教師育成のあるべき姿を考察するため、先行研究の調査をまとめ、日本語教師の資質として必要とされる「人間性」「専門性」「自己教育力」の3つを伸ばすカリキュラム構築の必要性を明らかにしている。

これらの先行研究から、従来の日本語教師には、教師の持つ知識や情報を学習者に効率よく教えること、いわゆる「専門性」が最優先に求められていたものの、その後、「人間性」を始めとする他の資質も重要であることが徐々に指摘されるようになってきたことがわかる。

データを収集し実証的に分析した研究として、縫部他(2005)が挙げられる。縫部他は、日本語学校が開設している教員養成課程を修了した教育実習生を対象に、望ましい日本語教師のイメージや教師が備えるべき教師の行動・態度特性に対する考え方について質問紙調査を行った。この質問紙調査の結果、教師像を「授業実践」、「カウンセリング・マインド」、「人間性」、「専門知識」、「経験資格」の5つの枠組みに分け、日本語教育実習生は、「専門知識」、「経験資格」よりも「カウンセリング・マインド」、「人間性」を重視することを明らかにしている。

小池(2004)は、学習者が期待する教師の役割を明らかにするため、国立大学の日本語研修コースを修了した19カ国の学習者を対象に半構造化インタビューによる調査を実施している。インタビュー結果から、教室内での教師の最も重要な役割に関するコメントをKJ法により分析を行い、分析の結果を基に教師の役割を4つのグループに分け、「授業内容・技術」、「学習者への支援」、「個々の学習者の状況管理」、「教師の自身の特質」と名付けている。以上の2つの研究は、教師と学習者のどちらか一方についての研究であった。

縫部(2010)は、教師及び学習者の2視点から日本語教師が備えるべき力量・専門性を調べるために、同じ質問紙を使った2つの研究、つまり、海外の複

数の国と地域で、学習者を対象とした縫部他(2006)と日本語教師を対象とした縫部他(2009)を比較検討している。その結果から、学習者と教師の両者ともが日本語教師は「目標言語・目標文化に関する専門的知識・技能」、「教授法・指導法に関する理論と授業実践能力」、「教育経営の力量」、「カウンセリング・マインド」を備えていることが望ましいと考えていることを示している。

また、ある地域に特化して、この問題を検討した研究もある。中井(2009)は、タイの高校で求められる日本人日本語教師像を明らかにするために、タイの高校で日本語を学習する学生 561 名及びタイ人日本語教師 101 名を対象に縫部他(2006)の手法を活かしつつ、タイの高校用にアレンジした 50 項目の質問を用いた調査を行っている。学生及び教師を合わせた回答について因子分析を行った結果、因子として、「資格と経験」、「教師の人間性」、「授業の実践能力」、「教師としての態度」、「語学力」、「異文化接触」が抽出された。6 つの因子の平均値を算出したところ、最も高かった因子は、「授業の実践能力」、続いて、「教師の人間性」、「教師としての態度」、「異文化接触」、「語学力」、そして「資格と経験」が最も低かった。この研究においては、「教師の人間性」、「教師としての態度」よりも「授業の実践能力」の平均値が高くなっていることが他の研究と異なっており、特筆すべき点となっている。

以上の先行研究から、日本語教師に求められる資質及び能力に関するこれまでの研究は、主に、海外、国内を問わず大学等の正規の教育機関で教える教師について研究されたものであることがわかる。一方、生活者としての外国人が増加しているにも関わらず、地域の日本語教室の日本語ボランティアに求められる資質及び能力の研究は、管見のところあまりない。また、調査の方法については、質問紙またはインタビューを単独でおこなった研究はあるが、質問紙とインタビューの双方を組み合わせたものは少ない。

### 3. 研究の方法

#### 3-1 調査の目的

本研究では、日本語ボランティアに関して、教師と学習者の双方を対象に、前者には質問紙調査を、

後者にはインタビュー調査を行う。この調査の目的は、地域の日本語教室における効果的な日本語教育の実現を目指して、以下の点を明らかにすることである。

課題 1：日本語教室の日本語ボランティアは、どのような資質及び能力が必要と考えているのか明らかにする。

課題 2：日本語教室の学習者は、日本語ボランティアにどのような資質及び能力を求めているのか明らかにする。

#### 3-2 調査の対象

調査を行うのは、筆者がボランティアとして所属している愛知県岡崎市の日本語教室である。この教室には、毎回日本語ボランティア約 30 名、学習者約 70 名が参加している。この教室は、毎週土曜日の午前と午後各 2 時間開催しており、学習者のレベルに応じて、ひらがなから、日本語能力試験 N1 までの幅広いレベルのクラスを展開している。日本語ボランティアは全員が無報酬であるが、そのうちの 4 割弱は、いわゆる日本語教師の資格<sup>3</sup>を持っている者である。学習者には、中国人、ベトナム人、ブラジル人、フィリピン人が多い。学習者の職業は多様で、愛知県では自動車メーカーを始めとする製造業が盛んなことから、工場で働くアジア諸国からの技能実習生、南米の日系人、企業内転勤により日本に来た会社員を始め、日本人配偶者の主婦やその子供などがいる。

<sup>3</sup> 「日本語教師の資格」という用語については、法務省入国管理局の「日本語教育機関の告示基準」(2016)の中で、「教員」は、①大学または大学院で主専攻、副専攻の日本語教育科目の履修、②日本語教育能力検定試験合格、③大学卒で 420 時間の日本語教師養成コース修了のいずれかに該当する者であることが規定されていることから、一般的にこの条件に該当する者が「有資格者」と呼ばれている。この基準は日本語学校の基準であるが、本稿でもこれらの 3 つのいずれかの条件を備えていることを「日本語教師の資格」と定義して、この用語を用いる。

### 3-3 調査の方法

本研究では、日本語ボランティアには質問紙による調査を、学習者にはインタビューによる調査を行い、量的データと質的データによる実証的分析を行う。

日本語ボランティアに対する質問紙調査では、縫部他(2005)が Moskowitz(1976)を参考に作成した質問紙を用いた。調査協力者の日本語ボランティア 26 名には、41 項目の質問について地域の日本語教室の日本語ボランティアが備えているべきだと思うかどうかを 4 件法(1=重要でない~4=重要である)で評定することを求めた。

外国人学習者 4 名には、半構造化インタビューによるインタビュー調査を実施した。筆者が日本語のみを用いて、個別に 1 人 30 分の半構造化インタビューを行い、その内容をインタビューシートに記録した。調査方法をインタビューにしたのは、筆者が、日頃接している顔見知りの学習者だからこそ、質問紙では引き出せない、本音が引き出せる可能性があると考えたからである。

### 3-4 分析方法

#### (1) 課題 1 の分析方法

日本語ボランティアへの質問紙による調査から収集したデータを記述統計法によって分析する。各項目の平均値を算出し、平均値の高い項目順に並べる。その結果から、日本語ボランティア自身が必要と考える資質及び能力、必要ではないと考える資質及び能力を考察する。

#### (2) 課題 2 の分析方法

学習者への半構造化インタビューから収集した回答の中から、学習者間に重複する項目を抽出し、学習者が日本語ボランティアに必要と考える資質及び能力を考察する。また、学習者の回答した項目が(1)で得られたデータの項目に当たるか照らし合わせ、学習者と日本語ボランティアの意識の差を考察する。

## 4. 調査結果と考察

### 4-1 日本語ボランティアが必要と考える資質及び能力

課題 1 の日本語教室の日本語ボランティアは、どのような資質及び能力を必要と考えているのか明らかにするため、日本語ボランティアが必要と考える質問項目の平均値を高い順に並べ順位付けしたものが表 1 である。なお、表中の「区分」については、先行研究の縫部他(2005)において質問項目をその内容により分類して抽出した 5 つのカテゴリー、つまり、「授業実践」、「カウンセリング・マインド」、「人間性」、「専門知識」、「経験資格」を示している。

初めに、必要とされた上位の項目について分析を行う。最も平均値が高かったのは、平均値 3.77(標準偏差 0.50)で「人間性」に分類されている「異なる言語や文化に対する寛容性がある」である。これは、日本語教育でしばしば重視される「異文化理解」に含まれる項目である。特に、地域の日本語教室は、国籍、年齢、職業等が異なる多様な学習者で構成されていることから、日本語ボランティアと学習者との間の異文化接触のほか、学習者間の異文化接触もあり、日本語学習の上で日本語ボランティアに必要なものとして強く考えるのであろう。したがって、この質問項目が 1 位になったことは、地域の日本語教室では当然のこととも思われる。また、従来から必要とされてきた「専門知識」や「授業実践」に関する項目を抑えて、この「人間性」に関する項目が 1 位となったことで、本調査の日本語ボランティアたちは、2 で述べた「1985 年報告」及び「2000 年報告」で指摘された日本語教師に求められている資質を十分理解できているものと思われる。

平均値が 2 番目に高かったのは、平均値 3.73 の 3 項目である。そのうち、1 項目の標準偏差は 0.44 で、2 項目の標準偏差は 0.52 となっていた。3 つのうち標準偏差が小さかったのは、「カウンセリング・マインド」に分類されている「学習者が間違っても気まぐれい思いをさせたり、ばかにしたりしない」である。第二言語の学習では、学習者が、発音や語彙等を始め簡単なことを何度も間違えることが他の学習科目と異なり現れる。母語話者から見れば簡単な間違いかもしれないが、学習者の状況を考え学習者を尊重する姿勢は必要であるということであろう。標準偏差 0.52 のうちの 1 項目が、「カウンセリング・マインド」に分類されている「楽しんで教えている」で

ある。日本語教室は、日本語能力の向上を主な目的とした日本語学校と異なり、日本語能力の向上のみを目指すものでなく、学習者の学習目的も様々であることから、まずは、楽しいことが重要で、そのためには日本語ボランティア自らが楽しむことが必要と考えるのであろう。標準偏差0.52のもう1項目が、「授業実践」に分類されている「学習者の能力に合わせて授業を進める」である。日本語教室では、日本語学校のようにカリキュラムに学習の期限が定められていないため学習の進行管理は日本語ボランティアの裁量に任されていることから日本語ボランティアは授業の進行を自由にすすめることができる。そのような状況の中で、学習者ごとの能力を把握し、可能な限り学習者ごとに学習内容を合わせる必要があると考えているものと思われる。その次に平均値が高かったのは、5位の平均値3.65の2項目である。そのうち、標準偏差が小さかった(0.48)のが、「カウンセリング・マインド」に分類されている「学習者の質問に喜んで答え、また質問に答えられる」である。学習方法に一斉授業方式をとる日本語学校と異なり、グループ方式をとる日本語教室では日本語ボランティアと学習者の距離が近いこともあり、学習者は、頻繁に質問をしてることがある。学習者からの質問には丁寧に対応し、日本語ボランティアと学習者間の信頼関係を構築する必要があると考えているのであろう。標準偏差が大きかった(0.55)のが、「授業実践」に分類されている「学習者が分からないとき、分かりやすく説明する」である。日本語教室の日本語ボランティアに限らず、一般的に教師であれば必要なことであろう。平均値が3.62(標準偏差0.56)で7位となったのは、「カウンセリング・マインド」に分類されている「教えることに熱心である」である。こちらについても、平均値5位の「学習者が分からないとき、分かりやすく説明する」と同じく、日本語教室に限らず、どこの教育機関の教師にも共通に必要とされることであろう。

次に必要ではないとされた下位の項目について分析を行う。最も平均値が低かったのは、平均値1.58(標準偏差0.63)で「経験資格」に分類されている41位の「修士号(またはそれ以上の学位)を持って

いる」で、その次に平均値2.04(標準偏差0.71)で40位となったのは「専門知識」に分類されている「日本語の古典に関する十分な知識がある」である。両方とも、それほど高度な日本語学習を目指さない日本語教室にとって、日本語ボランティアは必要ないことと考えるのであろう。平均値が2.12(標準偏差0.64)で39位となったのは、「授業実践」に分類されている「学習者の母語(または媒介語)で説明することができる」である。教室での学習には、直接法が用いられていることから、日本語ボランティアは学習者の母語で説明する必要はないと考えるのであろうか。永田・山本(2012)では、「学習者は、文法などが解らないとき母語を使用してほしいと考えている」とあり、また筆者自身の経験からも、文法の説明などは学習者の母語で説明することができれば学習者の理解がより進むだろうと思うこともあるので必要度が低いとすることは意外に感じられる。平均値が2.31(標準偏差0.72)で38位となったのは「カウンセリング・マインド」に分類されている「日本語以外のことについても相談にのってくれる」である。10項目のカウンセリング・マインドのうち、この項目だけ平均値が低くなっている。駒井(1999)でも、「外国人である日本語学習者は、日本社会の接点として、日本語をこえる日常生活の諸問題についての相談や助言をボランティアに望む」とあり、この点を学習者は強く求めることが示されているが、日本語ボランティアは必要性を感じず低評価になっている。この点で日本語ボランティアと学習者の間にズレが生じている可能性があると考えられる。平均値が2.35(標準偏差0.78)で37位となったのは、「経験資格」に分類されている「日本語教育に関する資格を持っている」である。日本語教室の学習内容のレベルは、それほど難しいものではないので41位と40位ほどではないが日本語ボランティアは日本語教師の資格は必要ないと考えるのであろう。平均値が2.38(標準偏差0.68)で36位となったのは、「経験資格」に分類されている「以前に外国語学習の経験がある」である。筆者が日本語教師養成講座を受講していた時、担当の教師から、教師自身が英語以外の新しい言語を一から学ぶことは、教師自身が学習者の立場を経験することで、新しい言語を学ぶ大変

表1 質問項目の順位、平均値と標準偏差

順位	質問項目	区分	全体(標準偏差)
1	異なる言語や文化に対する寛容性がある	人	3.77 (0.50)
2	学習者が間違っても気まずい思いをさせたり、ばかにしたりしない	カ	3.73 (0.44)
2	楽しんで教えている	カ	3.73 (0.52)
2	学習者の能力に合わせて授業を進める	授	3.73 (0.52)
5	学習者の質問に喜んで答え、また質問に答えられる	カ	3.65 (0.48)
5	学習者が分からないとき、分かりやすく説明する	授	3.65 (0.55)
7	教えることに熱心である	カ	3.62 (0.56)
8	標準的な日本語を話すことができる	授	3.54 (0.50)
9	学習者に日本語で話すことを促す	授	3.50 (0.69)
9	暖かく、やさしく、思いやりがある	人	3.50 (0.69)
9	学習者をほめたり、励ましたりする	カ	3.50 (0.75)
12	明るく、ユーモアがある	人	3.46 (0.63)
12	教室を和やかで、くつろいだ雰囲気にする	カ	3.46 (0.69)
14	必要なら教科書に出ていないことも教える	授	3.42 (0.69)
15	授業を面白く、楽しくする	カ	3.38 (0.62)
15	学習者からの提案や考えを取り上げる	カ	3.38 (0.68)
17	勤勉である	人	3.35 (0.68)
18	学習者の間違いを適切に訂正することができる	授	3.27 (0.65)
19	学習者のニーズに対応したコース設計をすることができる	授	3.23 (0.64)
20	日本語を正確に、且つ流暢に使うことができる	授	3.15 (0.53)
21	授業がきちんと構成されている	授	3.12 (0.64)
22	自分、他者、人生について楽観的である	人	3.04 (0.52)
23	日本語を1つの言葉として客観的に分析することができる	専	3.00 (0.55)
24	教室内において学習者に規律を守らせる	カ	2.96 (0.65)
25	プロとしての自覚を持っている	人	2.92 (0.73)
26	大きな忍耐力がある	人	2.88 (0.64)
27	日本の文化・習慣・歴史について幅広い知識がある	専	2.85 (0.53)
27	多様な教授法、教材、視聴覚教具を用いる	授	2.85 (0.82)
29	学習者の感情を受け入れる	人	2.81 (0.73)
30	日本語教師として十分な訓練を受けている	験	2.73 (0.76)
31	世界経済・国際問題について幅広い知識がある	専	2.65 (0.68)
31	外国語としての日本語教授法に熟達している	授	2.65 (0.73)
33	言語学の基礎的な知識がある	専	2.58 (0.63)
34	達成度、熟達度など、目的に応じてテストが作成でき、その結果を統計的に解釈することができる	授	2.46 (0.80)
35	指導経験が長い	験	2.42 (0.57)
36	以前に外国語学習の経験がある	験	2.38 (0.68)
37	日本語教育に関する資格を持っている	験	2.35 (0.78)
38	日本語以外のことについても相談にのってくれる	カ	2.31 (0.72)
39	学習者の母語(または媒介語)で説明することができる	授	2.12 (0.64)
40	日本語の古典に関する十分な知識がある	専	2.04 (0.71)
41	修士号(またはそれ以上の学位)を持っている	験	1.58 (0.63)

「授」：授業実践 「カ」：カウンセリング・マインド 「人」：人間性 「専」：専門知識 「験」：経験資格

さを実感でき日本語を教える上でとても参考になると聞いたが、日本語ボランティアにおいては低評価になっている。平均値が 2.42(標準偏差 0.57)で 35 位となったのは、「経験資格」に分類されている「指導経験が長い」である。こちら、筆者は、指導経験は短いより長い方がいいと思うが、日本語教室ではそれほど高度なことを指導しないので、指導経験は必要ではないと考えるのであろう。

次に、各項目の枠組み毎の結果を見てみよう。平均値の高い 10 位以内には、「カウンセリング・マインド」が 5 項目、「授業実践」が 4 項目、「人間性」が 2 項目となって、「経験資格」と「専門知識」の 2 つの枠組みの項目は入っていない。平均値の低い 10 位以内には、「経験資格」が 4 項目、「専門知識」と「授業実践」が 3 項目、「カウンセリング・マインド」が 1 項目となって、「人間性」は入っていない。したがって、上位には、5 つの枠組みのうち、「経験資格」、「専門知識」の項目は入らず、下位には、「人間性」が入っていないことがわかった。

5 つの枠組みの項目の内訳は、「授業実践」が 13 項目、「カウンセリング・マインド」が 10 項目、「人間性」が 8 項目、「専門知識」が 5 項目、「経験資格」が 5 項目で構成されているが、41 項目の上位 22 位までには、「授業実践」が 9 項目、「カウンセリング・マインド」が 8 項目、「人間性」が 5 項目とこの 3 つの枠組みの項目が占める。23 位になり、初めて「専門知識」の項目が出てくる。「経験資格」の項目に至っては 30 位で初めて出てくる。

さらに、質問項目の 5 つの枠組みに関する結果を見るために、41 項目を 5 つの枠組みによりその平均値で比較してみると、表 2 のとおりとなる。

表 2 質問項目の枠組みごとの平均値と標準偏差

	平均値(標準偏差)
カウンセリング・マインド	3.37 (0.75)
人間性	3.22 (0.72)
授業実践	3.13 (0.80)
専門知識	2.62 (0.70)
経験資格	2.29 (0.79)

調査先の日本語教室の日本語ボランティアが必要

と考える枠組みは平均値から、「カウンセリング・マインド(3.37)」、「人間性(3.22)」、「授業実践(3.13)」、「専門知識(2.62)」、「経験資格(2.29)」の順となることがわかった。

各項目の順位及び枠組みの平均値から、地域の日本語教室の日本語ボランティアが必要と考える資質及び能力は、教師資格や指導経験等の「経験資格」や言語学や日本の歴史に関する知識等の「専門知識」よりも、学習者との関わりに必要な力等の「カウンセリング・マインド」、教師自身の持つ性格、信念等の「人間性」、授業の指導方針、方法等の「授業実践」を重視していることがうかがえる。特に、「カウンセリング・マインド」、「人間性」という学習者との関係を構築するのに直接係わる資質及び能力を必要だと考えているものと思われる。

#### 4-2 学習者が求める資質及び能力

課題 2 では、日本語教室の学習者が日本語ボランティアにどのような資質及び能力を求めているのかを明らかにするためにインタビュー調査を行った。調査協力者となった学習者のプロフィールは表 3 である。

表 3 調査協力者のプロフィール

	属性(国籍・性別・職業・年齢・その他)			
A	ブラジル	男	会社員	30代 (日系人)
B	ベトナム	男	技能実習生	20代
C	中国	女	会社員	20代 (企業内転勤)
D	中国	女	主婦	30代(日本人配偶者)

本調査の対象となった教室の学習者には、南米の日系人、技能実習生、日本人配偶者の女性が多いため、その構成比に見合うよう、それぞれの属性の中から調査協力者を選んだ。

4 名の学習者に、「教室の先生は、どのような先生がいいと思うか」と半構造化インタビューした結果が表 4 である。学習者の回答から抽出された資質・能力に当てはまる内容を、それぞれ話の流れにそって順番に番号を付けて示している。

学習者の回答の中から重要と思われるコメントを取り上げ考察する。学習者の回答で、4 人全員が同

じ回答をしたものは2つある。1つが、「やさしい」である。

- A-① やさしい
- B-① やさしい
- C-① やさしい
- D-① やさしい

4人全員が揃って、1番目にこの回答をしたことから、多くの学習者が強く望んでいることだと言えるだろう。この回答を日本語ボランティアへの調査で使用した質問調査紙の表1に当てはめると9位の「暖かく、やさしく、思いやりがある」に該当し、枠組みでは「人間性」となる。林(2010)は、日本語教師の「やさしさ」について、異文化接触の最前線にある日本語教師としては必要不可欠の態度だと指摘している。特に、日本にやってきた外国人学習者にとって、日本という異文化の中に身をさらす不安や緊張のなかで、「温かく、やさしく、思いやりがある」態度で接してくれる日本語教師の存在は、孤立感や疎外感、違和感を覚える学習者にとって救いとなり、心のよりどころになると述べている。

もう1つ4人全員が同じ回答をしたのは、「教科書にある文章でなく、実際に使う日本語を教える」である。

- A-④ 教科書は堅い表現が多いので、日本人と話をするときには使える日本語を教える
- B-③ 教科書だけでなく、例えば今週のニュースについて話す
- C-⑤ 教科書に出てくる言葉でなく、日本人が話す言葉を教える
- D-⑥ 教科書の日本語ではない、実際の日本語を教える

こちらを表1に当てはめると、14位の「必要なら教科書に出ていないことも教える」や19位の「学習者のニーズに対応したコース設計をすることができる」に近く、枠組みでは「授業実践」にあたるであろう。

4人のうち3人が同じ回答をしたのは、「学習者に話をさせる機会が多い」である。

- A-③ 学習者に話しをさせる
- B-④ 教科書ばかりの勉強はいやだ。話せるようになることが重要だ

C-⑥ 学習者に話す機会を作る

こちらを表1に当てはめると、9位の「学習者に日本語で話すことを促す」と同じで、枠組みは「授業実践」にあたる。

表4 調査協力者の質問への回答

学習者	回答内容
A	①やさしい ②教える気がある ③学習者に話しをさせる ④教科書は堅い表現が多いので、実際に日本人と話をするときには使える日本語を教える ⑤日本の文化や歴史も話してくれる(日本の文化がわかると日本語もわかる) ⑥文法の説明は、ポルトガル語がよい
B	①やさしい ②話がおもしろい ③教科書だけでなく、例えば今週のニュースについて話す(ニュースについて話すとき、日本語が話せるようになる) ④教科書ばかりの勉強はいやだ、話せるようになることが重要だ(日本語は意味が似ている言葉が多く、話す言葉を選ぶのが難しい)
C	①やさしい ②冗談を言う(クラスの雰囲気がよくなる) ③厳しい人は苦手だ ④学習者のペースに合わせてくれ、気が長い ⑤教科書に出てくる言葉でなく、日本人が話す言葉を教える ⑥学習者に話す機会を作る(話す能力が向上する) ⑦熱心 ⑧学習者が興味のあることを話す
D	①やさしい ②日本で生活するのに必要な日本語を教える ③真面目な人 ④日本語以外の生活のことも教える ⑤わかりやすく、ていねいに教える ⑥教科書の日本語ではない、実際の日本語を教える

4人のうち2人が同じ回答をしたうちの1つが、



「熱心な人」である。

A-② 教える気がある

C-⑦ 熱心

こちらを表1に当てはめると、7位の「教えることに熱心である」と同じで、枠組みは「カウンセリング・マインド」にあたる。

日本人配偶者だけが望んだ回答が、「日本語以外に、生活のことを教える」である。

D-④ 日本語以外の生活のことも教える

こちらは、表1に当てはめると、38位の「日本語以外のことについても相談にのってくれる」と同じで、枠組みでは「カウンセリング・マインド」にあたる。4-1でも述べた駒井(1999)のとおり、この先、長く日本で暮らすことになる日本人配偶者の女性にとっては、単に日本語の学習だけでなく、日本で生活する上で、必要な多くのことを教えてもらいたいと強く望む気持ちは十分想像できる。

学習者へのインタビューで得たコメントの出現頻度から、学習者が日本語ボランティアに求める資質及び能力を質問紙の枠組みに当てはめると、学習者は日本語教室の日本語ボランティアに「やさしい」という、教師自身の持つ性格、信念等の「人間性」と「教科書にある文章でなく、実際に使う日本語を教える」、「学習者に話をさせる機会が多い」という授業の指導方針、方法等の「授業実践」を強く求めていることがわかった。さらにその次に「熱心な人」、「日本語以外に、生活のことを教える」という、学習者との関わりに必要な力等の「カウンセリング・マインド」を求めていることがわかった。この結果から、日本語教室の学習者は、「人間性」と「授業実践」を重視し、その次に「カウンセリング・マインド」を重視していることがうかがえる。

学習者が日本語ボランティアに求める資質及び能力は、「やさしさ」や「教科書にある文章でなく、実際に使う日本語を教える」のように学習者間で共通しているものもあれば、「日本語以外に、生活のことを教える」のように学習者の属性より求める事項が異なるものもあることがわかった。そのため、日本語ボランティアは個々の学習者が日本語ボランティアに対して、何を求めているのかを把握することに注意を払う必要があると思われる。

### 4-3 日本語ボランティアが必要と考える資質及び能力と学習者が求める資質及び能力の比較

4-1において、日本語ボランティアが必要と考える資質及び能力は、「カウンセリング・マインド」、「人間性」、「授業実践」が重視され、特に、「カウンセリング・マインド」、「人間性」という学習者との関係を構築するのに直接係わる資質及び能力を必要だと考えているとまとめた。

一方、4-2において、学習者が必要と考える資質及び能力は、「人間性」と「授業実践」を強く求め、その次に「カウンセリング・マインド」を求めているとまとめた。

本研究の日本語教室の日本語ボランティアと学習者の間で、必要と考える資質及び能力に大きな違いはなかった。しかし、学習者へのインタビュー調査の結果から、学習者は、日本語ボランティアが考えているよりも、学習者の日本語能力を向上させるために直接係わる「授業実践」に関する資質及び能力を求めていることがわかった。

日本語ボランティアへの調査から、「授業実践」の枠組みの中で、上位となったのは、2位「学習者の能力に合わせて授業を進める」、5位「学習者が分からないとき、分かりやすく説明する」、8位「標準的な日本語を話すことができる」、9位「学習者に日本語で話すことを促す」の4項目、下位となったのは、39位「学習者の母語(または媒介語)で説明することができる」、34位「達成度、熟達度など、目的に応じてテストが作成でき、その結果を統計的に解釈することができる」、31位「外国語としての日本語教授法に熟達している」の3項目に分けられる。これらを比較してみると、上位の4項目のうち「標準的な日本語を話すことができる」を除く3項目は、「学習者に関する項目」、それに対し下位の3項目は、「教師に関する項目」と言えるだろう。したがって、日本語ボランティアは学習者のことを理解した授業実践の能力を必要と考えていると思われる。

最後に、学習者が「授業実践」の中で具体的には何を求めているのかを学習者へのインタビューによる調査の結果から考察すると、日本語教室の日本語ボランティアには、テキストをマニュアルどおりに教えるだけではなく、学習者が実際に日常生活で使

用できるように実践的な生きた日本語を教えることを求めている。さらに、日本語の学習場面においては、学習者自身が発話する機会の多い、学習者が主体となった能動的な学習活動を行うことを望んでいるということが出来るだろう。

## 5.おわりに

本研究では、今後、国内に在住する外国人が増加し地域の日本語教室の担う役割が大きくなるなかで、教室の中心となる日本語ボランティアにも大きな期待が求められるようになるであろうという考えから、地域の日本語教室の日本語ボランティアに必要とされる資質及び能力を検討するため、日本語ボランティア及び学習者の意識について調査し分析を行った。その結果、地域の日本語教室の日本語ボランティアは、「専門性」、「経験資格」よりも、「カウンセリング・マインド」、「人間性」、「授業実践」を重視していることがわかった。これは、地域の日本語教室の日本語ボランティアには、専門的に日本語教育を学んでいない者も多数いるが、地域の日本語教室の状況を理解し、単に日本語を教えるだけでなく、日本語を教えるためには、それ以外にも必要なことがあることを理解できていることによると思われる。

さらに、学習者が求める資質及び能力も、「人間性」、「授業実践」、「カウンセリング・マインド」、教室の日本語ボランティアと同じ枠組みであるが、学習者は、特に実践的な日本語を学ぶことを求めていることがわかった。これは、学習者は、日本語の能力の向上に意欲を持ち、特に、自身の日常生活を向上させるための日本語を学びたいと考えているからだと思われる。

本研究は、日本語教室では、学習者の参加が継続しないことがあるため、その原因として教室の日本語ボランティアと学習者の間で、日本語の学習場面において日本語ボランティアに望まれる資質と能力について認識のズレはないのだろうかという疑問を持ち研究を始めた。調査の結果、両者の間に大きなズレはないものの、一部の点においてズレが認められた。

日本語教室は、授業に出席することが求められる日本語学校とは異なり、教室に参加するかしないか

は、学習者の意思に任されている。地域の日本語教室の日本語ボランティアへの調査から、日本語ボランティアは、学習者を理解し、尊重する姿勢が必要なことは十分理解できていた。したがって、学習者の学習動機を高め、学習者が継続していけるような、授業を実践する力と学習者が主体となった授業を運営する力を日本語ボランティアが身に付けることが、学習者の日本語教室での継続的な学習に繋がると思われる。そのためには、日本語ボランティアは、学習者が望む授業、教科書から離れた学習者のニーズに合った授業と学習者が積極的に学習場面に関われる授業を展開できる力を身に付けることが必要になるのではないかと考える。

今後、外国人労働者の増加により、地域の日本語教室には学習者の一層の増加が予想される。そのため、地域の日本語教室に関する調査の継続は不可欠だと考えられる。今回は、筆者自身が所属する1機関での調査であり、特に学習者の調査対象者が少なかったが、今後は調査対象を増やすことが課題とされる。

## 参考文献

- 小池真理(2004)「学習者が期待する教師の役割-半構造化インタビューの結果から」『北海道大学留学センター紀要』8, pp.99-108
- 駒井 洋(1999)『日本の外国人移民』明石書店, pp.202
- 中井雅也(2009)「タイの高校で求められる日本人日本語教師像-学生とタイ人教師の視点から-」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』6, pp.43-52
- 永田良太・山本眞理子(2012)「地域日本語教室における外国人支援の役割 -鳴門国際交流協会日本語教室の場合-」『鳴門教育大学研究紀要』27, pp.225-231
- 長野真澄(2013)「日本語教師の資質 -過去40年間における議論の変遷-」『環太平洋大学研究紀要』7, pp.197-204
- 縫部義憲・渡部倫子・佐藤礼子(2005)「日本語教師養成講座受講者の持つ教師像に関する事例調査 -日本語教師が備えるべき行動・態度特性の分

- 析一」『2004年度大養協論集』, pp.15-22
- 縫部義憲・渡部倫子・佐藤礼子・小林明子・家根橋伸子・顔草月(2006)「学習者が求める日本語教師の行動特性の構成概念」『日本語教員養成における実践能力の育成と教育実習の理念に関する調査研究 平成16年度～平成17年度科学研究費補助金基盤研究(b)研究成果報告書』(研究代表:中川良雄), pp.94-105
- 縫部義憲・河野俊之・坂口昌子・高木裕子・馬場良二・本田弘之(2009)「日本語教師が考える「優れた」日本語教師像と日本語教員養成制度に関する国際調査」『求められる日本語教員に日本語教員養成課程はどう応えるに関する総合的研究』(平成18年度～20年度科学研究費補助金基盤研究(b)研究代表:中川良雄), pp.57-127
- 縫部義憲(2010)「日本語教師が基本的に備えるべき力量・専門性とは何か」『日本語教育』144, pp.4-14
- 林 伸一(2010)「期待される日本語教師像について」－外国人留学生の期待と教師の自己点検の課題－『大学教育』7, pp.57-68
- 文化審議会国語分科会日本語教育小委員会(2018)「日本語教育人材の養成・研修の在り方について(報告)」
- 横溝紳一郎(2002)「日本語教師の資質に関する一考察－先行研究調査より－」『広島大学日本語教育研究』12, pp.67-73
- 横溝紳一郎(2006)「学習者の多様性と日本語教師の役割:『学習者中心の日本語教育』の観点から」『講座・日本語教育学第5巻多文化間の教育と近接領域』, pp.2-12
- Moskowitz, G. (1976)「Competency-Based Teacher Education Before We Proceed」『Modern Language Journal』60, pp.18-23
- 文化庁日本語教員の養成に関する調査研究協力者会議(2000)「日本語教育のための教員養成について」  
<[http://www.bunka.go.jp/tokei\\_hakusho\\_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku\\_suishin/nihongokyoiku\\_yosei/pdf/nihongokyoiku\\_yosei.pdf](http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku_suishin/nihongokyoiku_yosei/pdf/nihongokyoiku_yosei.pdf)>2019年12月8日アクセス
- 法務省入国管理局(2016)「日本語教育機関の告示基準」  
<<http://www.moj.go.jp/content/001265460.pdf>>  
2019年12月8日アクセス
- 文部省(1985)「『日本語教員の養成等について』の送付について」  
<[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/nc/t19850530001/t19850530001](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19850530001/t19850530001)>2019年12月8日アクセス

(Received: January 21,2019)

(Issued in internet Edition:February 6,2020)